

2021年度第1回入学試験問題

国 語

「始め」の合図があるまでは問題を見てはいけません。

注 意

- 1 「始め」という合図で始め、「やめ」という合図で、すぐに鉛筆をおきなさい。
- 2 問題は2ページから8ページまでです。
- 3 解答用紙は問題冊子にはさまれています。
- 4 初めに、解答用紙に受験番号・氏名を記入しなさい。
- 5 答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 6 字数制限のある問題については、かぎかっこ・句読点も一字と数えなさい。
- 7 文字はていねいに書きなさい。
- 8 質問や用があるときは静かに手をあげなさい。

— 次の文章は、田辺聖子『夕ごはんたべた?』の一節です。開業医の吉水三太郎は、何を考えているのか分かりづらいつらいところがあり、家族からは「半仙」と言われています。ある日、不良息子の大吉が家出から帰って来ました。以下の文章を読んで、後の間に答えなさい。

十五日めの晩、つまり半月たった日の夜である。

玉子は、例のごとく台所で夕食の支度をしていたら、三太郎が診察室からやってきた。

「おい大吉が帰ってきた」

「ほんと!」

「六平と一緒にや。それはええが、六平、よめはんをつれてきとんねん」

「何ですって」

三太郎のうしろには、久しぶりのにこにこことやさしい微笑を浮べた六平がいた。

そのうしろに、彼と同じくらい長身の痩せぎすな婦人がいる。大吉はいちばんうしろにふてくされた顔で、うす汚れて、すこし小さくなっていた。

大吉を見て、まっ先に罵声が出そうになった玉子は、さすがに六平の細君と初対面なので、そちらの挨拶からしなくてはならない。

応接間へ通した。

六平の細君は、色白の、かわいらしい顔の婦人である。赤い縁の眼鏡などかけているが、六平と同じように、にこにこしていた。

(これが、えらい大学の先生かしら)

と玉子は緊張して、長々と挨拶をはじめた。

その間、大吉ははしつこの椅子に坐って、のんびりした顔でいる。

「仕事、すましたらくるわ」

と三太郎が立っていったので、玉子は、夫のぶんも、しゃべらなければいけなかった。

婦人は気さくにしゃべった。

玉子は、大学の先生というからには、Xだろうと思っていたら、やさしい上方なまりである。

「ほんで、一人でよう帰らん、いうて大吉さんがいいはるさかい、わたしら

二人でついてきましたの。お母さん、どうぞ、堪忍してあげて頂戴ね、——ちようどええ折やし、あたしらもご挨拶にうかがおう、思うて……」

玉子は婦人に気をとられながらも、大吉のチャツカリぶりに腹が立った。診察をすませた三太郎がやってきた。

三太郎は、あたまから湯気の出るほど腹を立てていた。

のっそりと家をあげ、やっとな帰ってきたと思うと、ヒトを楯にしてうしろへ隠れて風当りを避けようとする。男らしくないではないか、といいたいのだ。

「大吉!」

と三太郎がいうと、座は一瞬、しんとした。

いくら半仙でも、やっぱり一家の主の風格が出るのだろう。

「なんで黙って家をあげる。出ていくつもりなら帰ってくるな。なんのつもりや、それは。ノコノコ帰ってきて」(略)

1 「まあまあ、兄ちゃん」

と六平が間へ入った。

「ま、兄ちゃんの怒るのもわかるけど、……大吉も反省しとるんやし」

「反省してるようには見えん」

「まあ、ええやんか」

ええことない。

三太郎は、はじめをつけたい気である。どうしてことわりなく家を出たり入ったりするのだ。

「親の家にいる限りは勝手なこと、するな」

「兄ちゃん、まあそう、親の家、親のメシいうたら、若いもんはカツカくるさかいなあ」

六平はそういうが、三太郎はこんどは六平に腹が立つてきた。親が、親かぜ吹かせてどこがわるい、と思うものだ。

「あの……」

と、六平の細君が、可愛いらしい声で口を挟んだので、六平も三太郎も口をつぐんだ。

「大吉さんもしよげてるみたいやし……自分ではあやまりたいと思っても、若いひとというのは、おとなに向ったときのヴォキヤブライが少ないのん

ですわ。手持ちのことばがないので、どないいうたらええもんか、途方にくれてて……思いあまったあげく、あたしたちを通訳にして、お父さんお母さんに詫びを入れたい、とこんな所と違いますかしら。ね、大吉さん。同時通訳したら、こんなとこやね」

とやさしくいうと、石のように硬くなっていた大吉はこっくり、する。みんな笑うが、三太郎と玉子は笑えない。

六平夫婦の手前、いつまでも三太郎はふくれつつらをしているわけにはい

かず、

「今日はゆつくりできるのか」

とお愛想をいう。

「うん、そのつもりできた。どうもごぶさたしてしもて。その後の報告もあるし」

話題がおとな同士のことに移ったので、大吉はこれで釈放された、というように、生色せいしきよくをとりもどして、体をもぞもぞと動かしはじめた。

「大吉、もう行ってもええで。——あとでよう、お父さんに謝るときや」

と六平はやさしくいう。三太郎の思うに、それは無責任のやさしさである。無能、無定見の場合も人はやさしくなるものだが、無責任の場合も、人はやさしい。それはほんとうのやさしさとはちがうのだが、区別出来る人は少ない。

そうして、大吉が、クサリを解かれたように跳ねて飛んでいく後姿を見ると、三太郎はどうしても（おい、ちよつと待て。オマエさつきから一ト言ひとことも、ものいわんやないか。——何もかもヒトにしゃべらせてすませとるやないか。

Y 卑怯ひきょう陋劣ろうれつ、というのは、オマエのことではないか。男らしくないぞ）と大喝して、息子をぶんなぐりたくなる。……しかし、わざわざついてきている六平夫婦の顔を立てて、言いたいコトバを飲みこむ、それがほんとうのやさしさ、のような気もするのだ。

かつまた、三太郎はほんとうに大喝したり、ぶんなぐったり、できる男ではない。

そう思うのと、実際に行動にうつすのとは大ちがいだ。できないから、しぜんにふくれつつらになるのだが、そこを六平たちがやってきて、うやむやにごまかしてくれたから、たすかった気も、しないではない。そのへんもい

うなら、屈折したおとなのやさしさ、みたくないものであろう。しかし三太郎はそうごまかく分析するクセはない。漠然ぼくぜんと感じるだけである。（略）

細君はハンドバッグから名刺をとり出し、

「もつと早くご挨拶にうかがうつもりでいましたのに、つい遅うなりまして。今年は何国へ出る用事が多うて——どうぞよろしく」

と可愛いらしい声でいい、三太郎と玉子の前にそれぞれ置いた。女物の小ぶりな名刺である。私大の助教授という肩書があつて「鞍馬くらま富士子」というリツパな名前があつた。吉水六平などという頼りない名とは格段の差である。（略）

（略）

「大吉がよくおたくらの家を知ってましたなあ」

三太郎はお詫びの意味をふくめていう。

「ええ、あたしたち、『ゴンドラ』いう喫茶店で会いましたから。二三べん、うちへ遊びにきはったかしら。泊ったこともありますわ」

「まあ」

と玉子は目をみはつた。

「そんな、ご厄介やつかいかけてたんでございますか」

子供というものは何をするかわからない、と玉子も三太郎も思った。鞍馬女史は大吉を通じて、吉水家と接触しているつもりでいたかもしれないが、玉子たちは夢にも思わぬことであつた。六平がそこへかえってきた。

「大吉の奴、いうとらへんから何も知らなんだ」

三太郎がいうと、六平はすぐ、

「まあ、ええやんか。若いときは、あんまり、家の中でしゃべらんもんでなあ」

と若者を庇かばう言い方をする。いつもの通り、若者サイドに立っているのである。

「いったい、どこへいつとつてんやろ、大吉の奴」

「平戸から長崎へ廻まわつたらしい」

玉子と三太郎は顔を見合わせた。いつか、長崎へんを旅行したいと二人で話したとき、台所に大吉がいたが、そのときにヒントを得たのだろうか。六平はのんびりしていた。

「五島列島まで渡ったそうやなあ」

「ふーん。結構なことでございますなあ」

と三太郎はいわずにおれない。

「お天気つづきで、とつてもよかつたそうですわ、海がきれいでしたつて」
鞍馬女史は無邪気にそういい、

「六ちゃん、シチュー、たきすぎたら焦げつくよ。もう、持ってきてきなさい」
と六平に命じる。(略)

いっぺん、改めて大吉を叱らないといけない、と三太郎が思っている、

いい機会が来た。——彼が居間にいると、大吉もそこへ来たのだ。そうして、

三太郎が食事をはじめても、出ていかない。

いつもは、顔を合わせるのを避けて、そそくさと姿を消すのに。膝を抱いてテレビを見ている恰好は、三太郎には寄り添うように感じられた。

そう感じたときは、親はやはり、声をかけてやりたくなる。仕方ない。

三太郎は意地を張って、親の方からは折れぬ、という根性の男ではないのである。

「オマエ、なんで長崎へいった？」

「それは……この前、お父さんが、お母さんに話してたから……思いついた」

大吉は素直にいう。

2やはり、しゃべりたかつたらしい。大吉はぶっきらぼうな口調であるが、反撥の感じられない返事をする。

「どうせ、お父さんらも行くやろ。その下見にいつてきてやつた」

3「こいつ！」

「絵葉書、見る？」

大吉は身を翻えして台所から、絵葉書を持ってきた。そうして、地図をばしゃばしゃと拡げて、コースを説明するのである。

「ここから、船で四時間もかかつた！ 地図見ると近いけど、乗ったら遠いねん」

「待て、どこからどこや」

と三太郎は眼鏡をかける。

「まず、どこへいった」

「長崎」

と大吉は得意そうにいう。

「お蝶さんの家があつたか。お母さんがいうてた……」

「これ、この絵葉書。グラバー邸やろ」

「よかつたか」

「観光客で満員でどないもならへんねん。いま観光シーズンやし、なあ。お父さんら行くときは、シーズンはずした方がええわ」

「連休でない、休まれへんやないか」

「そんなこというてんと、タマには休んで骨休めしたらええやんか。長いこと働いて」

「大きに……おい、どないなつとんねん、これは」

三太郎は妙な気分になる。息子の家出をとつちめようと思つていたのに、どこでどうまちがつたのか、話がへんな方へすげ変えられてしまった。

「ここは、皿うどんがおいしかつた。お父さんらも、そこで食べたらええわ。地図書いたげるから……。お母さん美味しがるよ」

「皿うどん、なあ」

若者向らしい好物である。

「ここから福江へ渡つた。船に乗りたかつたから。お父さんらも、いっぺん乗つたらええねん」

「五島列島へいったのか」

「あ、もつとええ航路あつた、ここへお父さんらいっぺん来たらええのになあ、と思うた」

大吉の話では、さながら旅行中たえまなく両親のことを考えていたように聞こえる。

(田辺聖子『夕ごはんたべた?』(新潮社)より)

問1 に最もふさわしいことばを次から選び、記号で答えなさい。

ア 理智的な標準語 イ 丁寧なですます調 ウ 粗野な共通語

エ 気色悪いがまます言葉 オ 分かりやすい公用語

問2 傍線部1「まあまあ、兄ちゃん」と六平が問へ入った」とありますが、このときの六平の気持ちとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 兄の三太郎とは考え方が違って反りが合わず、なるべくもめごとを起こしたくないと思っている。

イ 三太郎と玉子の代わりに大吉を更生させようという決意のもと、大吉を守ろうとしている。

ウ 立派な肩書の妻を連れてきた優越感に浸り、三太郎を自分の意見に従わせようとしている。

エ 三太郎と大吉親子の世代間のギャップを認識し、両者の橋渡しを務めようとしている。

問3 大吉が家出から帰って来た日の三太郎の不機嫌な顔つきには、どのような心情が込められていますか。ふさわしくないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大吉はしかるべき制裁を受けるべきなのに、六平が安易にその過ちをうやむやにするのは、到底納得できない。

イ 見識ある親として、道はずした子をいつでも強く叱責できるのに、周囲がそうさせないことに業を煮やしている。

ウ 節度を守り、守れなければ自分でその過失を挽回する大人になってほしいのに、大吉の振る舞いにはその片鱗もなく、憤っている。

エ 許可なく家を出て行きながら、困ると親を頼りに帰ってくる大吉の意思の弱さや自分勝手なところを非難している。

問4 **Y**に最もふさわしい四字熟語を次の語群から選び、カタカナを漢字に直して答えなさい。

- ジゴウジトク アクセンクトウ キシカイセイ
コウガンムチ フゲンジッコウ

問5 傍線部2「やはり、しゃべりたかつたらしい」とありますが、大吉が言いたかったのはどのようなことですか。次の空欄に合うように、本文中から最もふさわしいことばを二十字以内で抜き出し、最初の三字を答えなさい。

20字以内 ということ。

問6 傍線部3「こいつ！」とありますが、このときの三太郎の気持ちとしてふさわしいものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 胸くそが悪い イ そらぞらしい ウ 気はずかしい
エ 慕わしい オ うれしい

問7 鞍馬女史の性格を説明した次の文章の空欄に最もふさわしいことばを入れなさい。なお、**A**・**B**・**C**は後の選択肢から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

三太郎や玉子とは違って、大吉に対しては**A** **3**字な立場であり、また三太郎たちの苦勞に格別配慮するわけでもない**B** **3**字な人柄のため、物怖じすることなく大吉の窮状を**C**している。その**C**は学者らしい豊富な**D** **8**字を用いて、的確に言い当てたものである。

【Cの選択肢】

ア 定義 イ 断言 ウ 記録 エ 曲解 オ 分析

問8 二重傍線部「大吉はいちばんうしろにふてくされた顔で、うす汚れて、すこし小さくなっていった」とありますが、これはどのような心情のあらわれですか。本当は何をしたのかにも触れつつ、四十文字以上五十文字以内で答えなさい。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

わたくしが館長を務めている国文学研究資料館(国文研)は、全国の大学共同利用機関として大規模なデータの集積、整備、発信をしています。また、館内にある数十万点の文芸や歴史史料、あるいは新日本古典籍総合データベースという、高精細画像や書誌データなどを検索するための仕組みを用いて様々な共同研究を行なっています。新型コロナウイルスの影響を受けて四月からは閉鎖していました。

国文研の資料を見ていると、過去の書物には、社会が天災に遭遇したときに、その中でお互いにどう守り、コミュニティをどう再生したかという経験が多く記録されていることに気付かされました。

感染症についての文献も多く残されています。戯作者の式亭三馬には、享和三年(一八〇三)に江戸を襲ったはしかを描いた『麻疹戲言』という小説があります。そこでは「うめきながら、彼らが飲むもの、食べるもの、まるで味がしない。ひとりぼっちで体調が回復するまで一二日間を、指を折って布団の中で待つ以外ないのである」とあります。当時、感染症は二〇〜二五年に一度、人生で二、三回は経験するものでした。感染症の怖さを肌感覚で知っていて、どう体作りをするか、どう衛生状態を保つか。人々は出版物や講談などを通じて情報共有していたのです。文政七年(一八二四)に再流行した際の『麻疹瘡語』には、芝居も(略)営業停止にした江戸の様子や、客が来ず生活できないという人々の嘆きが書かれています。1二〇〇年前の日本人が、驚くほど今と似た状況に直面していたことがわかります。

安政五年(一八五八)のコレラ流行について書かれている『安政午秋／頃痢流行記』には、夫が体調を崩して働けなくなり、無理をした妻が先に亡くなるという話があります。困窮しているところを町内の人が見かねて葬式の費用を出すけれど、妻は残した夫が心配だと亡霊となって夜な夜な出てくるのです。ある種の奇談ですが、人はひとりでは生きていけないということがa示唆されています。当時から、感染症は社会全体で乗り越えないといけないという認識でした。2古典は、共同の経験知の集積であって、その意味では、私たちにとって大事な資源なのです。

また江戸時代の後期、天保年間(一八三二〜四五年)には、大雨による洪

水や冷害によって、全国的な飢饉が起ります。いわゆる「天保の大飢饉」ですが、その時に出された『豊年教種』という書物があります(天保四年(一八三三)刊)。この中に、当時の人々がお互いに助けあう時の心がけについて記述された箇所があります。お米のある人がお米を持ち寄って、ない人に向けての炊き出しをする。困窮している人をどのように助けたらいいのか。「飢えたる人に粥を施すには尤も恭しく謹みて与へよ。必ず必ず不遜にして人を恥づかしむべからず」とあります。その人が困っているのは天災だからであって、自分のせいではない。明日はあなたが困窮するかもしれないから、という意味のことが書かれています。

「A 徳あれば B 報あり」という言葉があるように、人に施しを与える、誰かを助けたりすることは、周りの評価などを期待しないで、淡々とシェアしなさいという文化が、江戸時代にはあるわけです。それは今でも日本の文化に生きていると思います。自分の名前を出して、これだけのことをしているとは主張するような人については、恥づかしいというか、悪目立ちしているのではないか、といったプレッシャーがかかる。でも、逆に、今はそこは変えていくべきではないかと考えます。

東日本大震災以降、あるいはその少し前から、日本でもボランティアの文化が広がり、bシントウしました。実際に多くの若い人たちが、被災地に入り込んで活動されました。現地に赴くことも重要ですが、現地に行けなくてもできることは沢山あります。「このプロジェクトを信じるから自分は寄付をしたけれども、あなたもどうですか」というように、もっと気軽に、お互いに呼びかけ合えるような状況が作り出せないか。寄付をすることで自分を拡張する、自分を新しく何かにコネクトしていく、そういう意識が大切ではないでしょうか。今回のコロナ禍を通して、新しい感覚を育てることができるよう気がしています。そのための一歩として、3寄付やボランティアは特別なことだし、ちよつと違う、恥づかしいなと思う気持ちを無くしていきたいです。

(略)

大規模災害など非常時のさなかや直後には、一時的に連帯感やcコウヨウ感が高まってモラルも向上し、今後の社会をより良くしようという意欲が湧くとされています。新型コロナウイルスが終息したとき、私たちは社会に何を残せる

でしょうか。パンデミックの状況にある今から手を着けておかないと、喉元のどもとを過ぎれば熱さを忘れてしまう。社会のどこをどう良くしたいと感じたのか。不便や不安を極めた状況で、どんな種を見いだして意識や制度を変えていくのか。尊い命が失われ、経済的にも大変な価値が損なわれました。人々の努力に応え、喪失感を埋めるためにも、一つでも二つでも変えるきっかけが生まれればいいと思います。

いま私たちは、**4 ソーシャル・ディスタンス(社会的距離)**を保ちながら連帯感を築くという二律背反に直面しています。子どもに朝食を食べさせ登校させられない一人親世帯、手を挙げて「困った」と言いづらい人たちがいます。普段から声を出すといじめられる、浮いてしまうと感じている人たちが、社会文化資本にアクセスできないような立場の人は、現在のような状況では、適切なタイミングで声を挙げないと命にかかります。

ひとりになってしまつて話ができる相手がない状況が、一番の弱者ではないでしょうか。自分が悪いわけではないのです。頑張っているのだけれども、なかなかその状況から抜け出すことができない。困つてしまうと、どうしても自分というものを閉ざしてしまう傾向に、私たちはあるんですね。でも、そこはぜひ聞く耳を持つ相手を探して欲しいですし、私たち一人ひとりが、明日は誰かを助けられるかもしれない、そういう自分になりたいという気持ちを持つこと、持てる環境をもっと整えていくべきではないでしょうか。隣で感染が広がれば、自分にとつてもリスクです。一緒に立ち向かっていかないと、新型コロナウイルスには勝てない。数日姿を見ない人、一人暮らしのお年寄りなどに声をかけていくことが大切だと思います。

新しい生活様式は、私たちの感性を変え、日々の行動パターンも変えていくでしょう。らせん階段を上るようにして、私たちは色んな角度から新たな景色を迎えるはずで、社会の変化をくみ取り、新たなビジネスを世界に打ち出すチャンスかもしれません。若い人にはアイデアがあるし、わたくしの知る限り、もう考え始めている人もいます。

ソーシャル・ディスタンスは、今はまだ物理的な距離として考えられますが、社会の中の自分自身の位置づけを知る、自分の居場所から他者との関係を見つめ直すことだとも捉えたい。一人ひとりの資質、意欲によって、自律的に能力を發揮できる社会をいかに整備できるか、そこが問われています。

す。女性の活躍の場を広げる、様々なセクシュアリティのあり方を認め合う、今後も増えると予想される外国人と共存していくなど、課題は山積しているように見えますが、一方でこの半年間に味わった経験の中には、大きなチャンスが芽を出そうとしているように思います。

5 それぞれが、その人に合った適切なソーシャル・ディスタンスを保持しつつ、他者の喜びや痛みをフェイクではなく確かな事実として理解するような連帯感に溢れた社会、そういう未来を是非迎えたいものです。

(ロバート・キャンベル『「ウィズ」から捉える世界』村上陽一郎編)

『コロナ後の世界を生きる——私たちの提言』(岩波書店)より

問1 傍線部 a c の漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直しなさい。

問2 傍線部 1 「二〇〇年前の日本人が、驚くほど今と似た状況に直面していた」とありますが、「今と似た状況」とはどのようなものですか。その説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 庶民は自主隔離かくりによって命が助かって、経済的な困難により苦しめられていた状況。

イ 庶民の営業自粛じしゆによって感染拡大が抑えられ、感染症が社会全体で乗り越えられた状況。

ウ 芝居の禁止など人の密集を避ける政策が行われており、庶民もそれに積極的に協力していた状況。

エ 芝居などの娯楽は人間の生活に欠かせないものであり、庶民は芝居を見て感染症の情報を共有していた状況。

オ 感染拡大の防止のために活動の制限が行われた一方で、それによって庶民は経済的な困難おちに陥おちっている状況。

問3 傍線部2「古典は、共同の経験知の集積であって、その意味では、私たちにとって大事な資源なのです」とありますが、どういうことですか。その説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 古典には、社会全体で感染症を乗り越えようとしていた人々の感情・対策や様子などが記録されており、感染症流行に直面している私たちの参考にもなるということ。

イ 古典には、協力して感染症に対処してきた人々の知恵が記録されており、それは当時の人の情報として有効だったが、科学的な知見のある現代においてはは無意味になっているということ。

ウ 古典には、感染症の恐ろしさや経済的苦境、娯楽の禁止などが現在と異なることなく客観的に記録されており、感染症が流行している現代においてもじゅうぶんに教訓になり得るということ。

エ 文学や歴史史料を中心とした古典資料は、高精細画像として保存され、それが書誌データとして集積されるようになっていて、大学の共同研究など現代の情報共有にも役に立っているということ。

オ 古典には、二十から二十五年毎に流行する感染症の様子が文学的に描かれていたため、当時の人の諦めや恐怖などの感情が現代人にも容易に理解できるようになっているということ。

問4 本文中の **A**・**B** に当てはまる漢字の組み合わせとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア A 一 B 半
- イ A 苦 B 楽
- ウ A 悪 B 善
- エ A 隠 B 陽
- オ A 美 B 醜

問5 傍線部3「寄付やボランティアは特別なことだし、ちよつと違う、恥ずかしいなと思う」とありますが、人々がこのように思うのはなぜですか。その理由を含む一文として最もふさわしいものを本文中から探し、初めの五字を書き抜きなさい。

問6 傍線部4「ソーシャル・ディスタンス(社会的距離を保ちながら連帯感を築くという二律背反に直面しています」とはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 感染防止のため他者と距離をとらねばならない一方で、孤立しがちな社会的弱者とも協力して立ち向かわねば感染の拡大は抑えられないということ。

イ 感染防止のために他者と距離をとる一方で、他者との接触を避けられない人々のために、寄付などの援助をすることによって、感染の拡大を防止するということ。

ウ 他者と距離をとることによって感染拡大が抑えられている一方で、社会的弱者は経済的にますます困窮し、社会文化資本にアクセスする他ないということ。

エ 社会的な弱者は、ソーシャル・ディスタンスのために誰とも接触ができなくなり、孤立するようになってしまいう一方で、そのことが感染防止につながっているということ。

オ 他者との距離をとらざるを得ず、経済的に損失を受ける人がいる一方で、社会の中で助け合う必要があり、寄付が重視されるようになっていくということ。

問7 傍線部5「それぞれが、その人に合った適切なソーシャル・ディスタンスを保持しつつ、他者の喜びや痛みをフェイクではなく確かな事実として理解するような連帯感に溢れた社会」とありますが、そのような「社会」では人々にはどうすることが求められますか。解答欄に合うように三十字以上四十字以内で説明しなさい。

	問 7	問 5	問 2	問 1	二	問 8	問 7	問 4	問 1	一					
10															
20															
30															
40															
50															
60															
70															
80															
90															
100															
110															
120															
130															
140															
150															
160															
170															
180															
190															
200															
210															
220															
230															
240															
250															
260															
270															
280															
290															
300															
310															
320															
330															
340															
350															
360															
370															
380															
390															
400															
410															
420															
430															
440															